

SPECIAL EDITION

# 学長インタビュー

木村 孟 学長

東工大を代表する学長先生はどのような人だろうか。

東工大生でこの問いに答えられるものはあまりいないのではないだろうか。ほとんどの学生には、学長先生に会う機会はありません、せいぜい入学式と卒業式ぐらいであろう。そのため、先生がどのようなことを考えているかあまり知られていないのではないだろうか。

そこでランドフォールでは、末松前学長にかわり昨年10月に学長に就任された木村孟先生にお話をうかがうことにした。



## 科学技術の基盤としての東工大

——先生は東大の修士課程のご出身ですが、東工大へいらした理由というのは？

私は東大を昭和36年に出ていったん会社へ就職したんです。当時は今と違って大学院に行く人がほとんどいなかったんですね。ところが私の指導教官が大学院へ来ないかと。そのころ、大学院に行く人が少なかったから先生の方で声をかけて大学院に来いということが結構あったんです。

はっきりした規則があったかどうかは覚えていませんが、当時、企業に籍を置いて国立大学の学生の身分を持つということは本当はいけなかったはずです。ですから実際には、会社は休職にして、給料をもらわない形にして、大学院に行ったんです。私と同じように就職しつつ、休職して大学院に来たという人が何人かいました。特殊なケースですね、社会人留学の草分けですよ。

大学院を終わって、企業で仕事をしていたんで

すが、結局は研究的な仕事をやることになるんです。それなら大学で研究する方がいいと思い、たまたま東京工業大学の土木工学科が昭和39年に設立されたので、助手として東工大に来たんです。私の先生は東工大の土木工学科の設立にかかわった方で、そういう希望があるのならやってみろとおっしゃられたので助手として来たのがきっかけですね。おそらく、東工大の土木工学科ができてなかったら私は研究者になっていなかったと思います。

——東工大で行われている研究についてはどうお考えですか？

東京工業大学で行われている研究教育活動は我が国にとって非常に大事なものです。日本がここまで来たのはやはり製造業を盛りたててきた結果だと思うんですよ。一時、理工系離れとか3Kと

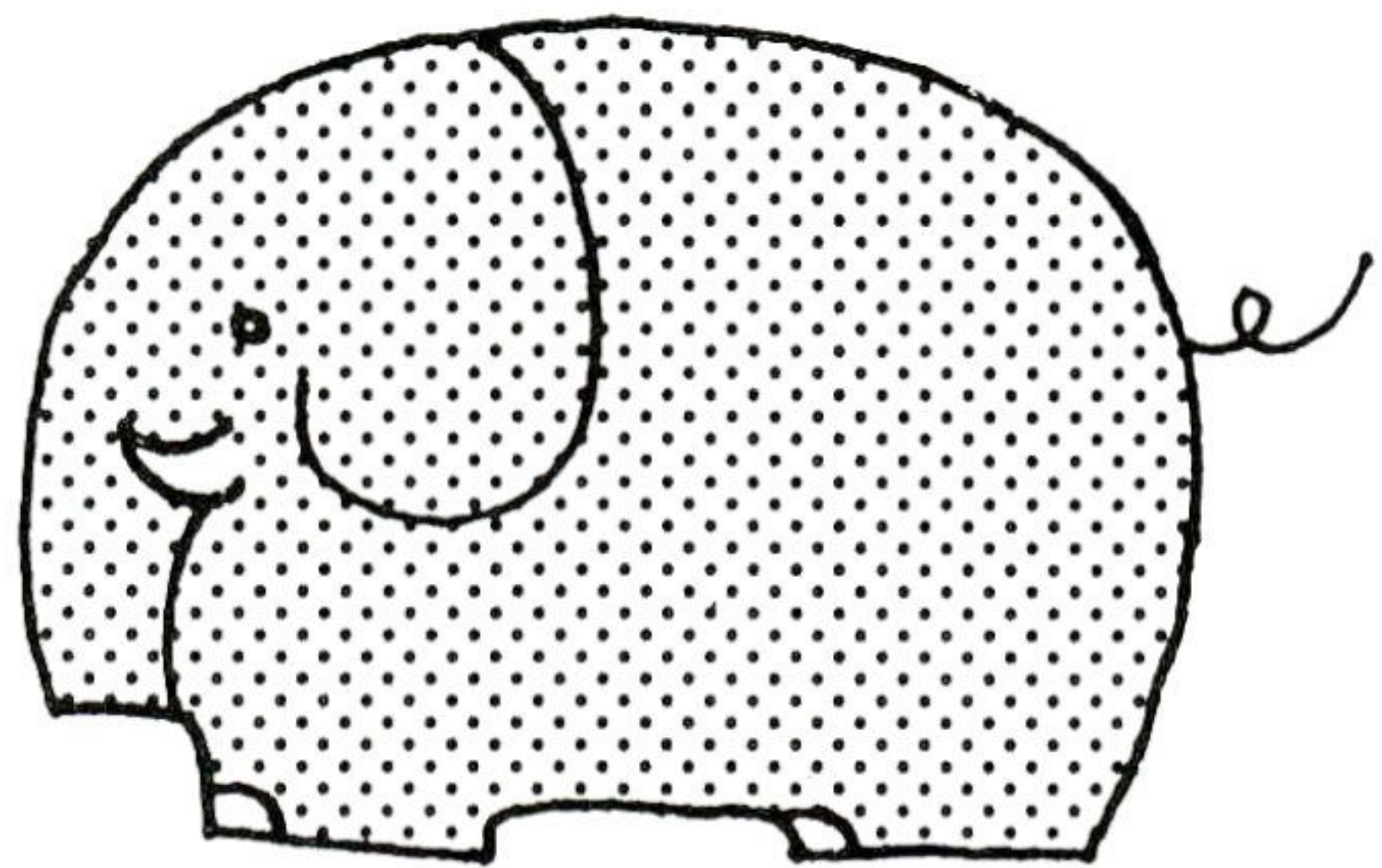


かいう問題がありましたが、私は、日本は製造業を捨てたらやっていけないと思います。今までと同様に製造業で日本は稼いでいかなければならない。これには科学技術の役割が非常に大切なんです。もちろん、基礎的なことをやることも必要です。基礎から応用ということが生まれていくわけですから。非常に先端的な研究も必要だし、伝統的なものも必要です。これらのコンビネーションというものが大事でしょうね。

——それを次代へと伝えていくにはどうすればよいでしょうか？

次の時代に伝えるには、まず、教育研究の環境をよくすることです。そうすれば、必ず若い人が教育にも興味を持ち、研究にも興味を持ちますね。奨学金などの環境の整備が必要だろうと思います。

それと研究は面白いということをわかってもらうことです。研究は苦しいけどうまくいくと非常に面白いものです。



昔は分野がある程度固定されていましたが、今は学際的な分野まで含めていろいろな研究ができます。生命理工学部という数年前にはなかった学部ができたわけでしょう。そういう新しい学問ができてるわけですから、いろんなことができるんですね。自分の興味のあることを探せるんですよ。

研究っていうのは本来おもしろいんです。そのおもしろさがわかるような、それでいて快適に研究ができるような環境をいかに作るかということではないでしょうか。

## 国際社会の一員としての自覚を

——現在の東工大の学生についてはどういうイメージをお持ちですか？

一言でいうと非常に優秀ですね。たとえば、卒論の最後の方になると非常に伸びるんです。もちろん全員ではありませんが、優秀だという評価をしています。

あと、よく東工大生は暗いといわれるけれど、私はそんなことは全然気にしてない。あれは、マスコミのイメージづくりみたいなもので、本質的

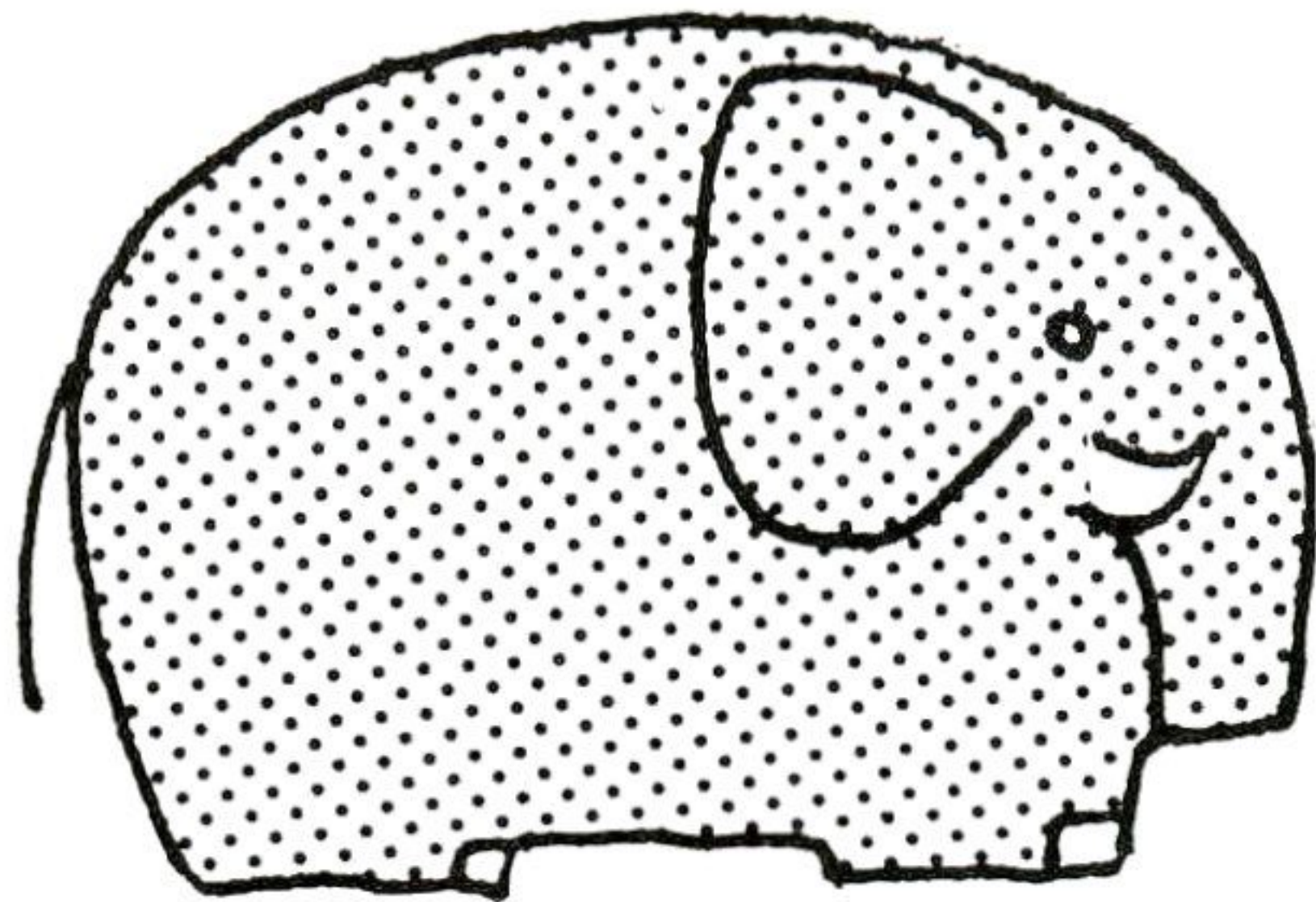
には若者はみんな同じですからね。特に最近は女性が増えつつあり、ますます明るくなってきていると思います。

それから、今の若者に共通していえることだと思いますが、何にでも興味を示すタイプの学生さんがやや少ないような気がします。興味さえ示せば、大いに伸びる可能性を秘めている学生はたくさんいると思います。

——最近女性が増えてきたことについてはどうですか？

これからの女性の役割っていうのは非常に大切だと思います。

最近女性がかかり社会進出していますが、もっと活躍できる場を提供しなければ、日本の損になりますね。文系ではずいぶん女性が活躍していますが、科学技術の分野ではなかなか活躍できていない。ですから、東工大に女性が増えることは大いに結構なことだと思います。





また、男社会で育った男性はどうも女性に対して硬いところがありますから、やはりある程度の比率で女性がいないと具合悪いんじゃないかなという気がしますね。

——学生に必要だと考えていらっしゃることは何でしょうか？

いちばん考えてほしいことは、日本という国が非常に世界的に重要な国になってしまったということです。国際社会の一員であるということを経験してもらいたいということです。決して自分だけがよければという時代じゃなくなりました。私達の時代は、自分がどうするかということを考えてればよかったんです。ところが、現在は君達一人ひとりの行動が国際社会にはねかえっていく時代になっているわけですよ。ですから、国際社会の一員であるということを経験してはならないですね。

国際社会の一員として認められるにはどうするかということは、やはり誰とでもつき合えるような素養を若いときからつくっておくということです。それには相手の立場になってものを考えるということが必要です。これはそんなに難しいことではなく、人に迷惑をかけないということに尽きると思うんですよ。それさえできれば、どんな人とでもつき合えます。もちろん人間だから好き好きはあります。それはもうしょうがない。

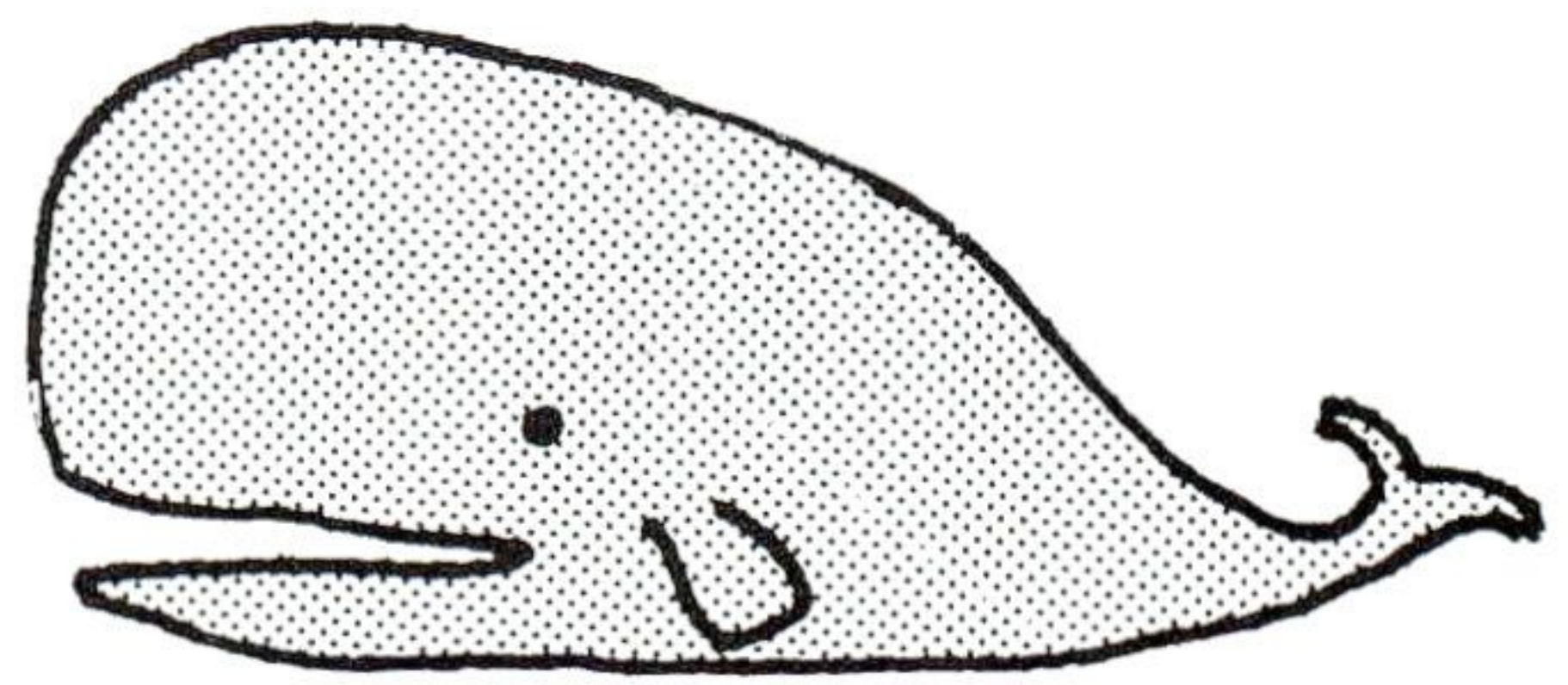
相手の立場になってたえずものを考えるということ、相手に迷惑をかけないこと、それが日本の若者にはちょっと足りないような気がします。

日本人としてだけのことで済まないということです。これから君たち個人個人で間違いなくそういう経験をしたいと思います。

## 人間を意識した科学技術を

——今後、東工大はどのように変わって行きますか？

大学改革の柱の一つとして、まず、いわゆる一般教育科目と専門教育科目の壁を取り除くということがあります。各大学でカリキュラムを自由にデザインできることになったんです。



私も英国に行った3年間でものすごい影響を受けたんです。英国に行って感じたのは、宗教の影響が強いということですね。自己犠牲とか、覇権を求めない、支配しないということが脈々と社会の中に息づいています。日本ではどうもそのところが欠落してしまったのではないかなという気がしますね。

たぶん絶版になったと思うんですが、イギリスのパブリックスクールに留学した人の本が昔ありました。その中で、英国人はよく”It’s not fair”ということをするという話が出てきます。たとえばそのパブリックスクールには、土曜、日曜はいつさい勉強も仕事もしてはいけないという非常に厳しい戒律があるんです。ところがこの人は、他から遅れているので何とかして勉強をしたいんですね。ところが、いつさいそういうエクスキューズは受け付けられない。同じ時間内でやれということです。

よく外国から、日本いろんな点でフェアではないといわれていますね。ある程度当たっているんです。日本人はものすごく働いてきました。ところが、彼らの考え方というのは、残業して相手の会社との競争に勝つのはフェアではない。同じ時間の枠の中でやって勝つのならよい。その辺の枠組みが厳然として残っているんですね。ですから日本はフェアではないだといわれるんです。

大学改革の中でもうひとつの柱は、現在は全てが学部ベースになっていますが、それを大学院に重点的に移そうとするものです。つまり大学院大学ということになるわけです。ある意味では、東工大はとっくにそうなっているんですが、それをさらに徹底しようということですね。

今まで、4年でいったん切れて、それから大学

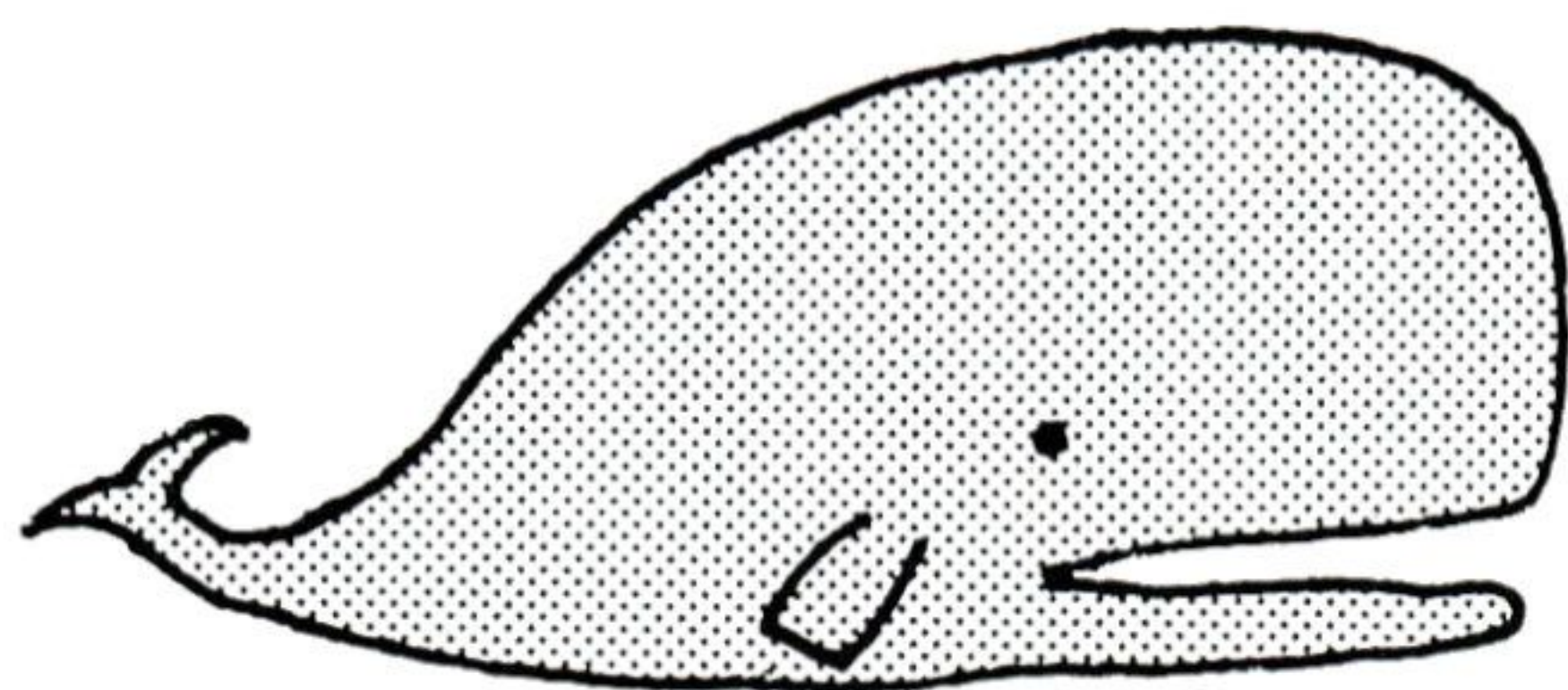


院に行くという感じだったでしょう。それが学部と大学院が一体化したような感じになってくるのではないかと思います。

大学院を重視するということへの反応として、「学部は大事ではないのか」「学部で卒業している人はどう位置づけるんだろう」ということがあります。学部が重要であるということに関しては従来と決して変わらないんです。学部4年生の時期は専門の基礎教育であるという姿は今までと同じですよ。そういう意味でいうと東工大としてはあまりやり方は変わらないんです。むしろ学部で出る人は従来よりもっと有機的に考えたカリキュラムで教育を受ける事ができるんです。

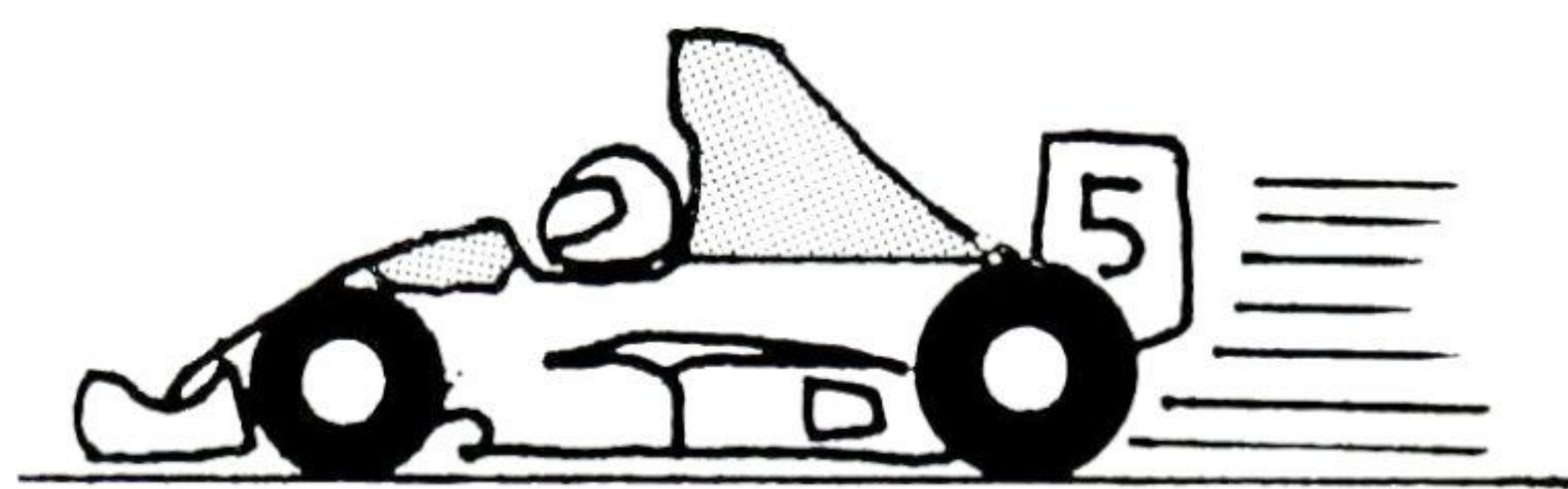
東工大というと、昔は「煙突あるところに蔵前人あり」といわれ、科学技術だけという感じをもたれていましたね。

しかし東京工業大学は他の大学に比べてはるかに従来から一般教育を重視した、非常に特殊な教育をやってきたんですよ。いわゆる人間の要素をたくさん加えこんで教育してきた、そのところを大いに生かしていきたい。専門教育といわゆる人間を重視した教育、つまり従来の一般教育との結びつきをもっと強固にして、いわゆる基礎教育、工学理学の基礎教育を学部でやろうと思っています。



紙面の都合もあり、残念ながらすべてを掲載することはできませんでしたが、この文章によって、学生が相談に来やすいように、研究室にいるときはいつでも部屋の扉を開けていたという先生のお人柄を知っていただけたら幸いです。

最後に、非常にお忙しい中、私達の取材に気さくに応じて下さった木村先生に心からお礼を申し上げます。  
(元木 光雄)



——従来から、一般教育と専門教育が混ざっているというのは東工大の特徴だと。

それをもっともっと徹底してやろうと。これは大変な事なんですよ。

和田小六先生という非常に偉い学長がいらしたんですよ。昭和19年の12月に学長に任命されて終戦を迎えたんです。先生はその時に何が日本にとって悪かったのかを一生懸命考えられたと思うんです。そして、戦前の日本が大きなまちがいを起こしたのは、たぶん科学技術だけしか教えてなかったからだというふうに気づかれたんです。それで東工大に、早くから専門と一般を混ぜるような教育方法を実施されたのではないかと思います。これが和田構想です。それを昭和26年からやっています。

その意味で、文部省や大学審議会がいている一般教育の大綱化は、東工大ではとっくに出来ているということもできます。そういう特徴のある大学です。何か東工大というと堅い大学だと思われがちですが、実はそうではないんです。歴史をさかのぼると、大変なことを和田先生はおやりになって、しかもそれをみんなでサポートしてきたんです。そのところの精神を生かして、人類としての倫理を絶えず意識しながら科学技術を進めていくことが東工大でやるべきことではないでしょうか。